

たのしさ、つながる、とやまの暮らし

2019 春号

とやま 日季

海辺のまちで、
出逢えるひと。



特集: 笹倉慎也さん・奈津美さん(氷見市) 今日の朝ごはん: 松本完さん(富山市) とやまで深呼吸: 富山きときと空港
石井隆一富山県知事の明日のとやまを拓く: 井手英策氏 とやま巡礼: 雄山神社 芦嶋中宮 祈願殿 とやまの品: FUKITO

自然のそばで、目覚める暮らし。

ひみし
氷見市 | 笹倉慎也さん(35) 奈津美さん(32)

笹倉慎也さんは富山市出身。妻の奈津美さんは茨城県出身。東京を離れて移住した氷見市で、海辺の宿「HOUSEHOLD」を2018年7月にオープン。氷見漁港や商店街にも近く、宿泊客自身が新鮮な地元食材で料理をしたり、釣りも楽しめる。暮らすような旅を提案する宿として人気となっている。「氷見の食や自然の風景、との出逢いなど、日常の感動を共有したい」と語る2人にお話を伺った。





海辺の小さな宿を、ふたりでつくって。

富山県西部の食都、氷見市で宿「HOUSEHOLD」を営む 笹倉さん夫妻。建物は氷見漁港のすぐそばにある。目の前に富山湾が広がり、釣り場までは徒歩数分。海岸や河口ではウミネコやトンビがのんびりと羽を休めている。何より、富山湾越しに立山連峰から朝日が昇る風景は、夫妻が多くの人々見て欲しい日常の中の絶景だ。

宿を始めた理由は、海辺で新しい住まいを探していたときに、元呉服屋だった築50年程のビルに出会ったことから。氷見駅から近い立地を生かして、宿を始めようと、信頼できる建築家、腕のいい大工さんらの助けを借りてリノベーション。2018年の夏にHOUSEHOLDはオープンした。古材を使った1階のカウンターテーブルのほか、アンティークチェア、もともとこの建物にあった建具、奈津美さんが集めた食器などがセンスよく調和する。時を積み重ねた、木の温もりが心地いい。印象的な赤い階段は自分たちで塗ったもので、2階はギャラリーやイベントスペース、3階は住まい、4階には大小の客室が2つある。屋上に上がると、黒瓦の屋根が輝く街並みや富山湾が広がり、360度見渡せる。夏は富山湾のあちこちで開かれる花火大会も見えるという。

宿の朝食も格別だ。近くの魚屋で仕入れた旬の魚をたっぷり使った味噌汁は、慎也さん特製で鍋ごと提供。魚の出汁の旨味と地元の味噌が実に合う。ほかに、地場の季節野菜のセイロ蒸し、つやつやの氷見産米の炊きたてごはん、近所の豆腐屋さんの特大がんもどきなど。民芸や地元作家の器、この建物に残っていた漆器などに盛りつけて出される。海岸で拾った石やシーグラスは箸置きに。豪華で遊び心あるしつらいに、感嘆の声があがる。





さくらしんや、なつみ 富山市出身の笹倉慎也さんと、茨城県出身の奈津美さん夫妻。慎也さんは大学院修了後、東京の大手印刷会社に就職。有名ブランドの企画ディレクターなどをしていた。やがて、自然も暮らしも豊かな富山に帰り、エンドユーザーの顔が見える仕事をしたいと思うようになった。奈津美さんは、大学卒業後、大手コンサルタント会社に勤務。旅館の女将になりたいと考え、旅館のwebマーケティングの会社に転職。旅館の繁忙期には仲居として働いたこともある。自分で何かを始めたいと考えていた2人は東京で出会った。慎也さんが氷見市役所の職員として採用されると、2人は2015年に氷見市へ移住。氷見の海岸で「フクラギウェディング」と名づけた手づくりの結婚式を挙げた。奈津美さんは氷見ではフリーランスとしてweb制作などに従事。慎也さんは市役所で2年間勤務したのち独立。2018年夏に氷見市で海辺の宿「HOUSEHOLD」を2人で立ち上げた。日常の感動を独自に編集して発信し、注目を集めている。

HOUSEHOLD 氷見市南大町26-10 <http://www.household-bldg.com>

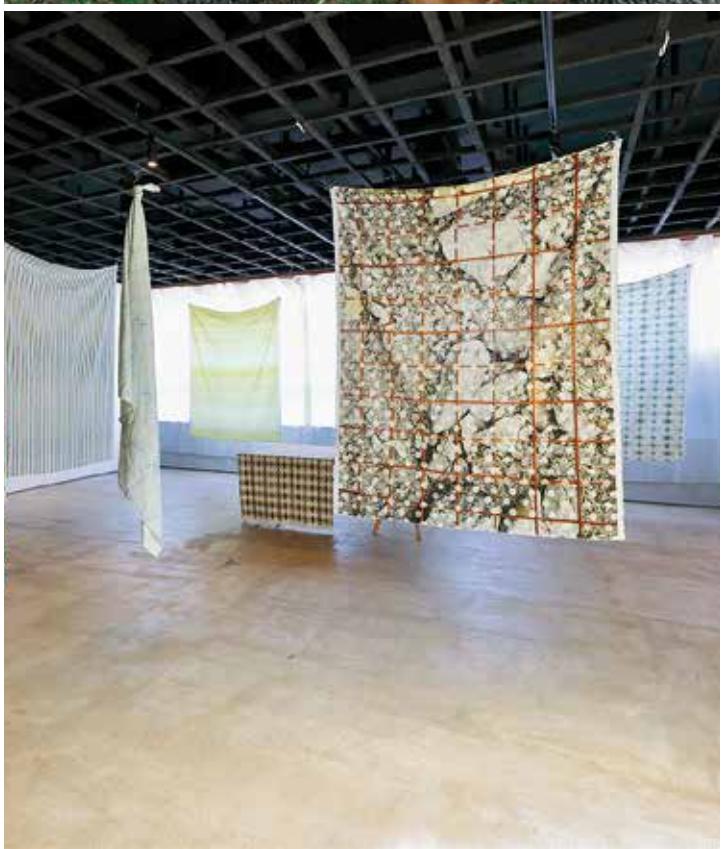


毎日を手作りしながら、つながる楽しさを。

この宿での楽しみは、やっぱり食。「勝手口から始まる旅」とうたう通り、宿泊者用のキッチンがあり、氷見の新鮮な魚や野菜を買って自分たちで調理できる。海外からのゲストに手づくりの料理をシェアしてもらうこともある。そのほか、地元の寿司店やうどん屋さんなど、おすすめのお店も宿泊者に案内している。「私たちが本当に好きな氷見の日常の食や自然を体験して、この場所が好きになつてもらえたならうれしい」と2人は語る。友人が忙しい時には平飼いの鶏の餌やりを手伝い、生みたての卵をもらうのも楽しみの一つ。食べ物が生まれる場所と人との距離感が、ごく近いのが氷見らしさだ。

海と里山の恵みが豊富な氷見では、知り合いが野菜を届けてくれたり、釣った魚をおすそ分けしてくれることも多い。若い2人がこのまちに住んでくれたことがうれしくて、応援したくて、何かと気にかけてくれている。近所の人気のうどん屋「みきさん」店主の掘野一宏さんは、心の拠り所とも言える相談相手だ。

HOUSEHOLDは家庭という意味。「日常の中で自分たちが味わっている感動を、たくさんの人と分かち合いたい」と言う思いを込めた。「富山には田舎ならではの素晴らしい資源がたくさんあり、それをポジティブに生かせば、遊びや楽しみがたくさん生まれます。受け手としてだけでなく、自分から発信すると、共感してくれる人が集まり友人もできるんですよ」と話す慎也さん。ギャラリーでの展示でも、交流の機会を自らつくりだしている。奈津美さんは宿の運営に、今後は、もっと力を入れていきたいそう。氷見を独自の視点で編集して、日常の楽しさを伝える2人。暮らしながら、手づくりしながら次の何かを生みだしていく。無限の可能性がここにある。





《富山の達人たちのとておきの朝》

今日の朝ごはん

作るひと：富山市・松本完さん

松本完さん、由紀さん夫妻と、娘のしほりちゃんのご家族が住むのは、富山市郊外の静かな住宅街の一軒家。松本家の朝は早く、主に料理を担当する完さんは、朝4時には起床する。朝の献立は和食が中心に。と言うのも、2歳の娘のしほりちゃんが、お魚やご飯が大好きなためだ。「娘はご飯と魚をものすごく食べるんですよ。娘のお陰で和食が中心になり、食生活が整ってきましたね」と夫妻は語る。

今朝のメニューは、富山産の「富富富(ふふふ)」のご飯と、天然のひみ寒ぶりのあらと地元産大根を使ったぶり大根。それに、大根菜と柚子を添えて。野菜は市内の八ヶ山の農家で作られたものを買ったり、もらったりすることが多い。生産者を応援するため、普段からできるだけ地元の食材を使うようにしている。お味噌汁は地元産のかぼちゃと小松菜を具材に。いただきものの白菜は、浅漬けで。富山市八尾町でつくられている豆腐は昆布締めにした。昆布で締めると、ちょっと濃い味わいになる。

完さんはもともと料理好きだったが、由紀さんが出産前に体調を崩したことをきっかけに、家族の食事づくりを担当。出産後も由紀さんが娘さんの世話で大変な分、自分ができることをと続けている。一方の由紀さんは、離乳食はすべて手づくりしていた。完さんも由紀さんも、「手づくりのおいしさを娘にも味わって欲しい」と思いを込めてきた。これは2人とも、母親の手づくりの料理で育ったことが大きい。漆器で、家族揃ってごはんを食べるのも楽しみ。漆器で食べると、おいしさが断然違うのだという。手づくりで、いいものをという2人の思いは、きっと伝わっていくに違いない。

今朝のメニュー：富山産「富富富(ふふふ)」のごはん／富山産かぼちゃと小松菜の味噌汁／ひみ寒ぶり、八ヶ山の大根のぶり大根、大根菜とゆずを添えて／八尾の豆腐の昆布締め／富山産白菜の浅漬け

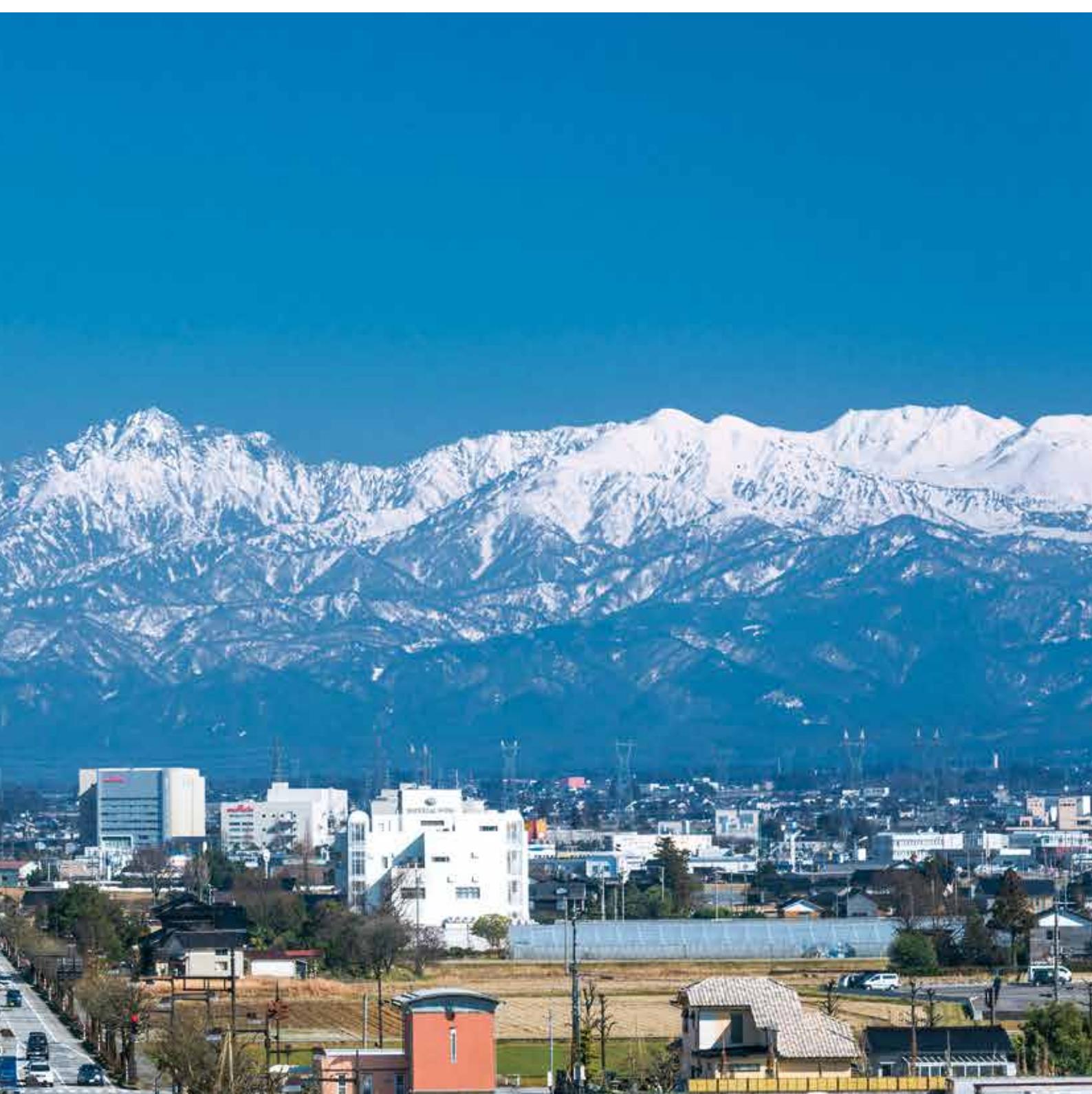
まつもとかん、ゆき、しほり 富山市内のガス配達・設備工事の会社に勤務するご主人の松本完さんと、富山県漁業協同組合連合会に勤務する由紀さんご夫妻。由紀さんの仕事の関係から、新鮮な魚を食べる機会も多い。「手づくりで、長く使い続けられるいいものを」と夫妻は語り、食事はもちろん、木の風合いを大切にした家づくりやインテリア、シンプルな業務用のキッチン、漆器、金継ぎされた器などからも、その思いが感じられる。



—とやまで深呼吸—

工アポートで、
絶景とごちそうを。

◎ 富山きときと空港



行き交う人の数だけ、物語が生まれる

のが空港。旅への期待感、世界への憧れ、人生の大切な節目に訪れる場所としても、

空港は特別な時間をくれる。富山きときと空港では、空の旅のほかにも日常の中で

の楽しみが様々にある。例えば、2018年にリニューアルした展望デッキ。バリ

アフリーとなり、快適に飛行機の離着陸を眺めたり、よく晴れた日には立山連峰の絶景を望むことができる。

さらに、富山の大きな魅力である食。絶品の回転寿司や富山ブラックラーメン、

地元食材を使ったイタリアンなど、県内外から、わざわざ富山空港へ多くの人が訪れる人気店が揃う。隣の富山県総合体育センターで体を動かして、心地いい汗を流すのもいい。空港ではロビーラウンジサートや多彩なイベントも開かれる。普段から気軽に立ち寄れる場所として、富山空港の魅力は、まだまだあるのだ。

富山空港内には、寿司店として県内トップクラスの人気店「廻転 とやま鮓」、東京ラーメンショー5回優勝の富山ブラック「麵家いろは」。富山湾の新鮮食材を使い、石窯で焼き上げる本格ピッツァが楽しめるイタリアンレストラン「エアポートキッチン」などがある。隣接する富山県総合体育センターでは、飛行機に搭乗、または、空港内テナント利用で特典あり(同日に限り)。無料駐車場は1,536台。空港内1店舗2,000円以上ご利用で、有料駐車場1時間無料券進呈。
©富山空港ターミナルビル(株)
富山市秋ヶ島30番地 TEL: 076-495-3101
<https://www.toyama-airport.co.jp>

展望デッキから望む立山連峰



明日のとやまを拓く

ゲスト

慶應義塾大学経済学部教授

井手英策氏



様々な分野からゲストを迎える、これから富山について語ります。今回は、富山の豊かさや女性の活躍について話し合いました。

豊かな富山との驚きの出会い

石井 先生は、富山県を10年以上もフィールドワークさ

れた集大成として、『富山は日本のスウェーデン』という名著を上梓されました。県内外の多くの方々に、富山県に

関心を持っていただきありがとうございました。

先生は、富山県のUターン率が全国で2番目に高い理由

として、経済の頑健さ、雇用の強さ、子育てのしやすさ、地域の支え合いの精神を挙げておられます。改めて、富山県の特色、魅力などについて、ご見解をお伺いします。

井手

最初の入り口は、富山駅前で信号待ちをしていると通勤の女性がたくさんいて、普通自動車を運転している女性が多いことに気づいたことでした。保守王国と言われる富山で、女性がこんなに働く社会とは何なのかなと。富山県発行の『100の指標』という本で気づいたのが、世帯収入が多く非常に豊かだということ。女性の正社員比率も高く、住宅面積が全国1位、子どもの学力も全国

トップレベル。人口は富山が全国37位で、その前後の宮崎、秋田の企業の売上高が約1兆円なのに對して、富山は約3・4兆円。3・4倍の経済力があることに衝撃を受けました。しかも、製造業の比率が日本で1番高く、工場でのシフト労働で女性が働きながら子育てできる環境があつた。男女とも働く社会を富山がつくってきたことに強い共感を覚えました。

いま、日本では専業主婦世帯の数が減り、男女が共に働く社会を国レベルでつくりようとしているときに、富山はそういう地域社会づくりをずっとやつてきた。家族の中で女性がやるとされているような仕事を、おじいちゃん、おばあちゃんや地域が担つてきた。つまり、女性に押しつけられていた仕事が社会化されているということ。

公費で、国レベルでやればスウェーデンのような社会民主主義になり、地域やおじいちゃん、おばあちゃんとやると富山になる。実は、富山モデルとスウェーデンモデルは、根っこが一緒じゃないかという発見です。

男女ともに働いてきた歴史

石井 富山県は、近年、勤労者世帯の実収入も全国トップクラスとなり、若い世代を中心に、Uターン率や県内への移住も増加しています。かつて、明治から大正期には、富山県から北海道や南米への移住者が全国有数で多かつた。当時は洪水など自然災害が多く、農村社会の暮らしは貧しかったためです。それが、壳葉や北前船を通じて蓄積した資本で金融業や電力業が生まれ、豊富な水と安い電力のおかげで重化学工業などの企業立地が進んだ。眞面目に働く県民性も幸いした。出稼ぎに行く男性が多かつたため、女性は家を守り子育てしながら、

自分も働いて家計を成り立たせていました。戦後、ものづくり企業が立地すると、女性も働くのが当たり前という元々の気風があつたため、共働きが多くなつたのです。3世代同居率も高く、小さな子どもの面倒は祖父母が見たり、地方としては早くから保育所も普及し、保育所の入所率も全国トップレベルです。

家族のように、ともに生きる

石井 そういう風土から、お年寄りも、小さなお子さんも、障害がある人も大家族のように過ごして支え合おうと

いう理念で、惣万佳代子さんたちが25年前に「富山型デイサービス」を始められました。認知症のお年寄りが小さなお子さんと一緒にいると症状の進行がとまり、良くなることもある。私が子どもの頃は大家族で、お年寄りが年とともに衰えていくことが、子どもながらに分かり、お手伝いもした。大家族のように過ごし支え合うという考え方はずごくいいことだと思います。

井手 認知症のおじいちゃん、おばあちゃんの体を専門家がストレッチで伸ばそうとしても難しいけれど、

子どもに「いないいないばあ」を見せたいとなると、背中がびんと伸びる。子どもとともに生きることは、生きがいだということですね。惣万さんは、お年寄りが寝たきりになつても、子どもが障害を持つしていても家族は一緒に生きていくものだと。なぜ、施設を分ける必要があるのかと。社会福祉法人アルペン会が運営している「あしたねの森」は、さらに発展させていて、大きな敷地の中に介護施設、保育施設、放課後等デイサービスや学童保育もある。大家族のように、死んでいく人間の悲しみ、育つしていく子どもたちへの温かいまなざしがある。

こういうモデルは行政がやらせたわけではなく、自然に出てくるところが富山県ですね。

一方で、富山は封建的で男尊女卑の社会だという批判があります。皆さんに聞いてみると意見は半々です。米騒動で立ち上がったのは女性。「富山型デイサービス」も女性が私財を投げうつて立ち上げた。全部に通じているのが「家族」と「女性の苦労」です。夫が出稼ぎの家庭で子どもたちがご飯を食べられない状況は耐えられない。だから、女性が米の値段が上がれば立ち上がる。家族を背負う人間の重みや、女性としての目線があるから高齢者や子どもの幸せにも思い至る。「保守的」だからこそ、負担は大きく、だからこそいざというときに立ち上がる強い心を持つた。富山の女性の苦労と同時に歴史を支えた強さを感じますね。

女性管理職を増やしていく

石井 知事就任の前年(2003年)には、県の女性管理職は4・8%で、全国12位でした。意欲のある有能な女性にもつと管理職として活躍してほしいと、キャリアアップにつながりやすいが責任も重い職務に女性を積極的に登用しています。例えば、かつて財政課の予算係には女性は皆無でしたが、最近は4~5名が普通です。2023年4月時点では15%が目標ですが、昨年(2018年)は13・6%で、全国で5位となり、今年は14%台になる見込みで、目標を前倒しで達成できそうです。

井手 それが民間にどう波及していくかですね。

石井 富山では民間も含めた女性の管理職は、製造業の比率が高いためか、7・6%ほどです。しかし、製造業の経営の方々の女性活躍についての考え方もかなり変

わってきている実感があります。

井手 朝日町笛川地区で聞いた、「執着しない家族」という言葉があります。元々、村は一つの家で、村内行事に全部参加してほしいと考えていたが、それでは若い人は離れてしまう。笛川地区の自治会長さんは、「地域は家族だけど、執着しちゃ駄目だ」と。それまでの大事な価値観すら変えていく危機意識を感じます。本のサブタイトルの、「変革する保守王国」の意味はそこにあるのです。

IOTで製造業をより強くし、働き方改革も進める

石井 製造業が強い富山ですが、IOT、AI、第4次産業革命の流れの中で、従来のものづくりに安住せず、グローバルな競争に勝ち抜く必要があります。IOTによって女性が活躍できる分野も広がります。働き方改革とともに、グローバルな経済環境の中で県内産業を持続可能にし、更なる発展・飛躍を目指したい。

井手 富山の最大の強みは製造業、第2次産業比率が高いことで、雇用の裾野も広く吸収力も強い。製造業は付加価値を生むため、雇用も吸収できて賃金も維持できる。その富山の強みを変えてしまうと富山の土台が揺らいでしまいます。製造業を維持し、質的な高度化を図ることは大賛成です。IOTやAI化で、男女を問わずアイデアを持つ人が活躍できる時代になると思います。

石井 2008年9月のリーマンショックの際には、安い労働力などを求め、また円高のくびきから逃れる等のため、富山県の製造業の海外展開の動きが強まりました。その際、私は、当該企業の生き残りのために必要

ン開発や新商品開発を支援しています。近く、VR、AR施設も整備します。県総合デザインセンターを巧く活用していただいたこともあり、高岡の能作などの伝統工芸品は国際的な評価が相当に高まっています。

行政は学びの場をつくる、 プラットフォームビルダーへ



働く大人の背中を、 子どもたちに見せる

井手 職場で社会体験をする「14歳の挑戦」についても、受入れ企業としてはかなり面倒なことも、全県レベルで行われていますね。

石井 子どもたちが働く大人の姿、背中を見ることで、学ぶ意欲が出たり、礼儀正しくなり、挨拶もしつかりで

山に残してもらうことを条件に海外進出をむしろサポートするという考え方で対応しました。何もしないで、企業が倒産しては元も子もありません。海外展開した企業の大多数がその考え方を尊重して下さり、有難く思っています。

さらに、県内の経営者の代表や全国レベルの専門家にご参加いただき、「富山県ものづくり産業未来戦略」を策定しました。例えば、富山県の医薬品生産金額は日本一になりましたが、その容器は県外に発注されていることが多い。そこで、県内企業の技術力を高め、そこに発注してもらい、お金が県内に回るように取り組んでいます。

県産業技術研究開発センターに世界水準の63の先端設備を整備し、企業の新技術開発・商品開発を、試作品開発や製品機能評価まで、一気通貫で支援しています。また、県総合デザインセンターでも、県内企業のデザイ

石井 富山県では、14年前から「とやま起業未来塾」を、8年前から「とやま観光未来創造塾」を創設し、各々、明日の富山を担う人材の育成に努めています。また、6年前からは「煌めく女性リーダー塾」を開講して、企業から意欲のある幹部候補生の女性を推薦してもらい、学び、交流する機会を設けています。女性の活躍には企業や業種の垣根を超えた女性同士のネットワークも大事で、その中でロールモデルになる人が出てくると、次の世代の女性に大きな刺激を与えて、良い循環になると考えています。

井手 地域は学びの場であり、その機会をつくっていくのは行政の仕事です。舟橋村を見たときに、プラットフォームビルダーという言葉を思いつきました。行政はサービスプロバイダーではなく、みんなが寄つてくる関係をつくる「プラットフォームビルダー」に変わっていくのではないか。お金をつけて何かをやらせるのではなく、学びの場をつくって関係ができれば、自立的な動きを期待できます。コミュニティに頼るだけではなくコミュニティをつくっていくことが大事で、それが行政から自然に出てくるのが富山の強みだと思います。

石井 ありがとうございます。女性の活躍を含めた富山の課題についても、ご助言をいただきたい。

井手 3世代同居率が下がり、コミュニティが弱つていく中で、富山では若い女性が県外流出しており、富山のモデルが崩壊する可能性があります。おじいちゃん、おばあちゃんや地域でやってきたことを、税金を通じて社会化していくことも必要です。痛みを分かち合い、みんな代に体験することは重要です。

で汗をかいていこうとするときに、その基盤を整えていくために行政が何をすべきかですね。

石井

日本の社会は依然として東京一極集中が続いている。そこで、地方創生の一環として富山県や全国知事会などが強く働きかけた結果、「東京から地方へ人の流れをつくる」という趣旨で、地方拠点強化税制が創設されました。

さらに、税の仕組み上、本社の多い東京に集中せざるを得ない地方法人関係税を地方に再配分すべきとの考え方で、東京都の小池知事とも激論になりましたが、地方法人課税の新たな偏在是正措置が創設されました。日本を一つの家族と考えれば、人も産業も大学も税金も東京に集中しすぎ、若者が最も多い東京の出生率が日本で一番低く、災害リスクは世界一高いと評価され、他方で、地方の疲弊が加速するという構造は持続可能でなく、抜本的な改革が必要です。



井手 舟橋村は人口が増えていますが、県全体で人口が減る中ではいずれ村も衰退する。県全体が元気でなければ意味がないと、駅の駐車場を開始時には無料開放して他地域の人も車を止められるようにしたり、シビックプライドを強めていく取組みがなされました。

なぜ、同じことを東京都の職員が思わないのだろうか。東京がいくら勝つても、全体が地盤沈下すると、いずれ、ともに沈んでいく。ともに生きる自治体の仲間として、むしろ、歩みの一番遅いところに合わせていく気持ちを持たなければ立ち行かなくなります。石井知事の中にある、我々は家族だからという富山県マインドに、いろいろな自治体の方が共感されるから、小池知事と渡り合えるのではないかと思います。

子育て環境をさらによくしたい

石井 北陸新幹線が大阪までつながると、日本列島のど

真ん中に、大ゴールデン回廊ができる。富山県の豊かで美しい自然をしっかりと保全・活用し、大伴家持以来の文化的な伝統、家族のような連帯感も大事にしていきたい。今後のアジア、ユーラシアの発展をあわせ考えると、大ゴールデン回廊の一角を占め、東海北陸自動車道や伏木富山港を有し環日本海地域のゲートウェイである富山県をはじめ北陸はすごく可能性がある県だと思っています。

井手 県外から人を呼ぶときの重要なポイントは、地域に溶けこむためのチャンネルをいかにつくるかで、これは市町村の仕事かもしれません。もう一つは、いい子育て環境をどう伸ばすか。暮らしの中にこそ、人々が移り住みたい理由があるのでないでしょうか。

石井 富山県では大都市圏などからの移住やU.I.Jターンの促進に積極的に取り組んでおり、3年前から

市町村と連携し、第3子以降の保育料は原則無料とし、昨年9月からは第1子、第2子も一定の所得以下の方

は保育料が無料（一部半額）です。かつて1・34まで低下した合計特殊出生率は一昨年は1・55に上昇しました。

企業子宝率を調べると、大企業よりも小さな企業の方が、かえって子どもの数が多い傾向がある。そうした企業は、お互いさまの明るい雰囲気で社員が助け合って、休みを取りやすいから。お互いに自立しながらも家族の

ように支え合える社会をつくり、若い人に、ここで働きたい、暮らしたい、家庭を持ちたいと思つてもらえる富山県にしたいと思っています。

井手 緩やかにというのが本当に大事だと思います。企業に勤めても、地域で暮らしていても、気にかけ合う関係の中で、みんなが生きやすい状況をどう行政がサポートするかなんでしょうね。

石井 まさにそうですね。ありがとうございました。

井手 どうも、ありがとうございました。

井手英策 いでえいさく

1972年福岡県生まれ。東京大学経済学部卒、同大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。日本銀行金融研究所、横浜国立大学などを経て現職。経済学博士。富山県行財政改革推進本部行革アドバイザー、富山県総合計画審議会総合部会専門委員。著書に「経済の時代の終焉」(第15回大佛次郎論壇賞受賞)「富山は日本のスウェーデン」など。

石井隆一 いしいたかかず

富山県知事。東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政担当審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に『元気とやまと塾』入門』『分権型社会の創造』『地方分権時代の自治体と防災・危機管理』など。

立山は神仏混淆の信仰の山として、立山登山により罪や穢れが落ち、仏と縁を結ぶことができるとされた。徳川家茂の正室、和宮も宿坊に寄進した記録が残る。江戸時代、立山は加賀藩領であり、当時始まった布橋灌頂会は、立山が女人禁制の時代に女性たちを救済する儀式だった。現在は3年に1回、復元イベントとして、全国から応募した女性たちが参加して行われている。

中新川郡立山町芦嶺寺2番地 <http://www.oyamajinja.org/index.html>

写真：左上より時計回りに、立山杉に囲まれた雄山神社、拝殿、大岩の上の若宮、大宮。



とやま巡礼

雄山神社 芦嶺中宮 祈願殿

あじくら

立山を望み、
祈りが捧げられてきた場所。

日本三靈山の一つである立山には、古来より地獄と淨土があるとされ、死者に会える山として信仰を集めた。修驗者の修行の山でもあった。その麓にあるのが芦嶺寺の集落。樹齢400年をこえる立山杉の木立の中に、現在の雄山神社芦嶺中宮祈願殿がある。実際に神秘的な空氣に包まれた場所だ。江戸時代には

中宮寺として、神仏混淆（こんこう）の宗教施設の中心の一つとなっていた。また、芦嶺寺には33軒の宿坊があり、宿の主で僧侶でもある衆徒が、全国で立山曼陀羅の絵解（えど）きをして回った。立山登山を勧めたり、女人禁制で登山ができなかつた女性たちに、布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）への参加を呼びかけたという。明治以降は神仏分離により、雄山神社へと名前が変えられた。

現在の拝殿は江戸時代に講堂だった建物。境内に立山開山の祖、慈興（じこう）上人坐像が安置された開山堂などがある。明治期に、近くにあった「うば堂」は壊されたが、「閻魔堂」、「布橋」は後に再建。神社に隣接する県の立山博物館などでは貴重な文化財が展示され、立山信仰の歴史を知ることができる。

とやま暮らしのことなら 富山くらし・しごと支援センター

とやま暮らしに関するご相談、移住支援制度のご案内、富山県内の現地案内のほか、仕事面も、経験豊富なキャリアカウンセラーが、就職面談、面接指導なども含め、就職決定までしっかりとサポートします。また、移住者の生の声が聴けるセミナーも開催しています。

富山オフィスと有楽町、大手町、大阪オフィスが相互に連携し、暮らしと仕事の一元的な相談に対応しています。

とやま暮らしがいいなと思ったら、富山くらし・しごと支援センターへお気軽にご相談ください。

◎富山くらし・しごと支援センター ◎有楽町オフィス(東京・有楽町／東京交通会館内)
くらし TEL: 080-8870-2456 しごと TEL: 070-2798-7878 ◎大手町オフィス(東京・大手町／パソナグループ本部ビル内) くらし TEL: 080-4157-0578 しごと TEL: 0120-108-250
◎大阪オフィス(大阪・道修町／(株)パソナ大阪内) TEL: 06-7636-6065 ◎富山オフィス
(富山市／(株)パソナ富山内) くらし TEL: 076-431-3691 しごと TEL: 076-444-5766
「くらしたい国、富山」ウェブサイト <https://toyama-teiju.jp>



今夏、国際的な舞台芸術の祭典 「第9回シアター・オリンピックス」富山県で開催

「シアター・オリンピックス」とは、鈴木忠志氏、テオドロス・テルゾプロス氏など世界各国で活躍する演出家・劇作家が、1993年にギリシアで創設した国際的な舞台芸術の祭典です。第9回となる今回は「Creating Bridges」をテーマに2019年8月23日(金)から9月23日(月・祝)まで、富山県南砺市利賀村と黒部市で開催され、世界の優れた舞台芸術作品30演目の上演のほか、ワークショップやシンポジウムなどの教育プログラムも実施されます。今回はロシアとの共同開催となり、2ヶ国開催は祭典史上初めてです。

第9回シアター・オリンピックス ◎芸術監督: 鈴木忠志氏 ◎主催: (公財)舞台芸術財団演劇人会議、シアター・オリンピックス2019実行委員会 ◎日程: 2019年8月23日(金)～9月23日(月・祝) ◎会場: 富山県利賀芸術公園「利賀」、黒部市宇奈月国際会館「セレネ」[黒部]、前沢ガーデン野外ステージ(YKK)[黒部] ◎チケットの予約は6月下旬開始予定。 写真・上: 富山県利賀芸術公園 下: 黒部市宇奈月国際会館「セレネ」 (写真: 富山県利賀芸術公園事務局(富山県生活環境文化部文化振興課内) TEL: 076-444-8650 <https://www.theatre-oly.org>)



鋳肌で魅せる、伝統と革新の食器。



FUKITO

FUKITOシリーズは、アルミを使用した鋳物の食器。重厚感のある見た目とは相反して、軽く、壊れず、持ち運びしやすい。高岡伝統の鋳物の高度な技を受け継ぐ、有限会社北辰工業所の新しい挑戦だ。デザインを手がけたのは相川繁隆氏。少量生産が可能な砂型製造による食器と共に開発した。FUKITOとは、平安時代に鋳物師を吹人(ふきと)と呼んだことにちなむ。砂型鋳造から生まれる鋳物には素朴な風合いがあり、細部にわたり職人の手仕事が活かされている。2016年度グッドデザイン賞に選ばれ、鋳物で食の分野をさらに切り開く、大きな可能性を秘めている。

FUKITOシリーズのアルミプレートの表面はテフロンコーティングがされ、油や水を弾くため汚れにくく、耐熱性に優れている。直火での料理や食洗機にも対応している。プレートの縁に施された模様など、手仕事の風合いに溢れたテクスチャーが魅力。料理をより美しく見せるデザイン性の高さから、レストランやカフェで使用されている。丸いプレートのほか、トライアングルプレート、ワインクーラーなどもある。北辰工業所の定塚康孝さんは、「食の分野での多様なものづくりの経験を生かし、次のステージに向かって、オリジナルで洗練された提案を続けてていきたい」と語る。

©(有)北辰工業所 TEL: 0766-63-5538 <http://www.hoxsin.com>